

「わたしを見たから信じるのか」
—ヨハネ「福音書」における交錯配列法の光の下での θεωρεῖν—

ὅτι ἑώρακάς με πεπίστευκας;
—θεωρεῖν unter dem Licht des Chiasmus im Johannesevangelium—

(1997年4月2日受理)

佐々木 寛 治
Kanji Sasaki

ヨハネ「福音書」はもともとは二十章構成であったが、その最後でイエスは「不信仰なトマス」に向かってこう言われている、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」(20:29:新共同訳)。この言葉を手がかりにして、およそ「見る」ということがこの「福音書」でどのように位置づけられているか、「見る」ということと現在終末論との関係はどうなるのか、こうした問題領域の一斑を考察してみたい。

われわれはまず、上の言葉の前半の「見る」と後半の「見る」が同じ意味として捉えられるべきでないことを確認する。次に、「イエス不在の闇」の中での弟子たちの怖れと悲しみを想起し追体験することによって、ヨハネ共同体とそしてわれわれの時代にやはり人の子・イエスを「見る」ということが成立するのであることが示される。この最後の「見る」が術語として確立¹することが可能となるにあたり、<告別説教的視野>からする交錯配列としての物語構成は——それが想起の瞑想空間を創出するという意味で——ヨハネにとって不可欠であったと思われる。

第1章 「だれを捜しているのか Τίνα ζητεῖς;(20:15)

第1節 「わたしたちは出会った εὐρήκαμεν」

「見ずして信ずる信仰」の勧めとしてよく知られた上記イエスの言葉は、「福音書」第1章末尾の「いちじくの木の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか。もっと偉大なことをあなたは見ることになる」(1:50)という、ナタナエルに向けられたイエスの言葉に対応している。巻頭・巻末で対応し合っているわれわれの二つの言葉は、まず「相手の信仰の今」を問いただし、次にこれをふまえて相手を高次の地平へと誘うという同一の構成・内容を持ち、口調までが全く同じである。「見る」という言葉が二回使われているのも同じである。これらの言葉の前後はどのように連なっているかが見られるべきである。《表-1》(p.163)の最下段の左右にこの物語の内容の予告・目的、その上の段の左右にわれわれの二つの言葉が記されている。順次各段の左右を対比しつつ昇って行けば、七段にわたって並行する二本の道筋が辿れる。各段の対応内容をまとめよう。

1)「見た」という証言、2)不信のテーマ、3)証人の設定、4) (イエスが) 見た・(トマスよ) 見なさいのイエスの言葉、5) (不信の破砕) 信仰告白、6)上掲二つの言葉、7)「福音書」の内容(予告・目的)。

この表を見つめていてわれわれがまず最初に注目したく思うのは、対応第5段「信仰告白」を受けかつこれを転倒させるものとしてわれわれの二つの言葉(対応第6段)がある、という一事である。

ヨハネ「福音書」は(J・L・マーティンが印象的に開示した如く)ユダヤ教側からの迫害圧力によって強く規定されている。「歴史に耐えることを得さしめる神学」——ヨハネはそのことを求めてキリスト教運動そのものを<反省>する。ヨハネの視線は「ユダヤ人」を介して、自分が内在しているキリスト教運動へと折れ曲がり、運動が孕んでいる隠された真理を浮き出させようとする。

著者ヨハネの語りの相手は運動を担う貴重な一人一人である。しかしその論法は苛烈である。ヨハネのイエスは、相手 A が柱と依り頼むものを先ず受け止め次にこれを転倒する²。イエスのこの特徴的な論法はヨハネの反省理論が要請する必然的な方法なのである。この論法はその途上でイエスの相手 A に自己崩壊を経験させるが、ヨハネの論理からすれば、相手 A の足下に孕まれている<真理>をこそただひたすら開顕している(反省的に定立している)だけなのである。

それでは対応第5段「信仰告白」に至る経緯はどうか。

ナタナエルもトマスも、最初は他者の証言に対して不信の言葉を発していた(対応第2段)。それがイエスの言葉によって破砕され(対応第4段)、二人とも自らの解体の底から信仰告白をしているということ。だから対応第6段のイエスの言葉は転倒の転倒を促しているわけである。

ところで転倒というのが、それは他者による「証言」(対応第1段)に対するトマスやナタナエルの態度の転倒であった。それは何についての「証言」だったか。

いま 1:45-51 を通覧し直し、さらに 1:35 まで遡行してみれば、この段落全体が 1:19-28 の段落によって準備されたものであり、その意味で両者が並行していることに気づかされる。この対比のもとでわれわれの段落を読めば、そこにはまことに多様な尊称がつかっているのが認められる。この流れの中から最後に、それら尊称の多様性を貫く一本の「真理」として浮かび上がるようにして、「人の子」が語られている³のが読み取れる。われわれの二つの証言で「出会った」「見た」と語られているのは、この意味での「人の子」であると考えらるべきであろう。定着しつつあるキリスト教運動の中で、だがしかし運動存亡の危機を具据えながら、ヨハネは(自分たちの時代に) <人の子に出会うとはどういうことなのか>を根本的に問い直そうとしているのである。

そのことは次の事実からもっと衝撃的に知らされる。イエスの物語の初めは地上を歩く神としてのイエスの到来であり、彼の最初の言葉はヨハネの二人の弟子への *Ti ζητείτε;* (1:38)、そのペリコペー最後のイエスの言葉がナタナエルに向けられたあの言葉だった。イエスの物語の終わりは復活のイエスの弟子たちへの顕現であり、彼の最初の言葉はマグダラのマリアへの *Tiva ζητείς;* (20:15)、そのペリコペーの最後でイエスは、トマスにあのように語られたのである。《表-2》(p.164)参照。そうするとヨハネの構成においてはこれら二つのペリコペーは、いわば神殿の丘(物語の内容)へと上る入口の門(刻銘文 *Ti ζητείτε;* を掲げたそれ)、ならびにそこから下ってくる出口の門(その上には *Tiva ζητείς;*)として併置(フルダの二つの門のように!)されていることになる(Vgl. マコ 13:1、ルカ 21:5)。ヨハネがこの物語の初めと終わり、アルファとオメガに、これほどの手を尽くし祈りを込めて緊密な対応を造り上げたということは、<あなたは何を・だれを捜しているのか>という問いがこの「福音書」の根底にある最重要の問いであること、しかもそれ

が向けられている相手はこの「福音書」の読者(たち)だということ(物語の配列特性を知るのは登場人物ではなく読者である)の雄弁な証左である。

しかもこの最重要の問いが問われるのは「ヨハネの時」からなのである。第20章第4段落冒頭の文面はトマスがイエスの直接の弟子でありかつ、(かの時のイエスたちと「一緒に」いることが不可能な)ヨハネ共同体=読者たちの愛すべき一信徒であることを示す。登場する人物像はこの信徒と瓜二つなのであろう。上述「二つの門」のうちの一方(マグダラのマリアートマス)の時は他方(ヨハネの二人の弟子—ナタナエル)の時でありかつヨハネの時である。イエス存命時から二世代の時を隔てて「人の子」に出会うということ、このことはアンテレ、シモン、フィリポ、ナタナエルたちの「聞いて信じ、見て証言する」信仰の時代(著者ヨハネはこれを理想化・神聖化して叙述している)と比較して、どういう意味で同一でありどのように異ならざるをえないのか——対応第1段第2段を見据える者に歴史に対するヨハネの危機意識が伝わってくる。

対応第1段左欄の1:45が位置している文脈を要約的に見ておく。

「福音書」第1章の構成

αα	ὁ λόγος καὶ ἡ μαρτυρία	(V. 1-18)
ββ	ὁ μαρτυρῶν καὶ ὁ μαρτυρόμενος	(V. 19-34)
γγ	εἰς τὴν Γαλιλαίαν	(V. 35-51)

γγのわずか17節に18個もの視覚言語⁵。さらに重要なことは、「見る」という言葉がほとんどの場合「言う」という言葉と結び合わさっていること——ααの「光は暗闇の中で輝いている」(1:5)という黒色金色の宇宙とその「明るさ」とは対照的に⁶——実に不思議な澄明さと軽みにつつまれた風光が出現。あたかも<ガリラヤへ>と向かう風のように流れていく語り⁷。

ββ 末尾：「わたしをお遣わしになった方が... わたしに言われた。そしてわたしは見て証しした、この方は神の子であると **καὶ γὰρ ἑώρακα καὶ μεμαρτύρηκα ὅτι οὗτός ἐστιν ὁ υἱὸς τοῦ Θεοῦ**」(V.33-34)つまり神の言われたとおりのことを預言者ヨハネは見て語った。このことを根拠にして—— **γγ 始まり**：預言者ヨハネが「[天から降って来られた神として地上を]歩いておられるイエスを見つめて言う **ἐμβλέψας...λέγει**」(V.36)。**γγ 終わり**：イエスの預言「天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ることになる **ὄψεσθε**」(V.51)。このようにγγの物語全体がまさに、<見て語ることの継承>、証言の連鎖として、<神の形態で地上を歩む>イエスを<ガリラヤへ>と運んでいく⁸。

さてV.45。「わたしたちは出会った **εὕρηκαμεν**」とフィリポは「証言」するが、V.45をV.41と比べてみればくっきりと現れてくるように、彼らの証言は啞然とするほど単純なものである。**εὕρισκει—εὕρηκαμεν**。誰かに出会う——「わたしたちは出会った」と言う、するとこの誰かは「信じて従い」、彼はともかくイエスと何らかの「接触」を経験し、次の誰かに出会い——「わたしたちは出会った」と言う。会えば伝わる証言の流れ(ナタナエルの段階で初めて不信のテーマ)。この連鎖の最初は、預言者ヨハネの二人の弟子が、「預言者が語るのを聞いてイエスに従った」(1:37)というものであった。このような「イエスとの出会い」に比べ、著者ヨハネの時代のトマスは「人の子」とどのようにして出会うことができるのであろうか。

第2節 信ずるに足るか否かを「見る εἶδω(ἴδω)」

巻頭・巻末に並行する二筋のペリコペーを併置することのもたらす効果は、甲乙二つ時の合わせ鏡の間に読者を立たせることである。このことによって著者ヨハネは、読者が甲乙の照合の中で自分の〈信仰の今〉を丙として反省する思惟空間を創出する(〈二重化された第2項〉=乙による丙の準備)——いまの時代にイエスに出会うとはどういうことか。ヨハネはさらに、巻末第20章に三つの種類の「見る」を対比して、ヨハネの時代の読者をして考えさせる——自分の「見る」はどのようなか。対応第1段右欄はそのようなコンテキストの中にある。

A 三種類の「見る」の、ヨハネ「福音書」での用法(概観)

1) εἶδω(ἴδω) 実際には第2不定過去形 εἶδον として使われるこの語の基本的性格は感性的知覚としての「見る」である¹⁰。Sehen, see, voir。——〈見るⅠ〉

2) ὁράω 霊と証言の次元で「見る」。感性的知覚の用例皆無。全30の用例中20例が現在完了形 ἑώρακα でその根本的な意味は〈イエスまたは神をその一致の相において見る〉用法¹¹——〈見るⅡ〉。信仰の告白、証言としても使用される。残り10例は全て未来形 ὄψομαι で、このうち「イエスを再び見るようになるだろう」(=A群16:16, 17, 19, 22)、「人の子(に)関連することを見るだろう」(=B群1:50, 1:51, 19:37 おそらく1:39も)がともに重要¹²。

3) θεωρέω 遠くを望むようにして判断を下しながら「見る」(Vgl. 4:19, 12:19 auch10:12)。〈見るⅡ〉にも判断の契機は当然内在する。θεωρέω の用法の著しい特徴はその否定形が肯定形に対して重要な意味をもつ、という驚くべき内包。「イエスを見なくなる」は θεωρέω の否定形で語られる(5-14:19, 16:10, 16, 17, 19)。ヨハネの意図は、見える／見えないの狭間を読者に意識させつつ、(この根本的な肯定／否定の狭間からしか窺い知れない底の、前代未聞の存在である「人の子」に出会う出会い方として)「イエスを見る θεωρέω」(7回)¹³という語り方をしようとする。——〈見るⅢ〉。形態を介しそこから窺われる本源的な何かに思いを向けるという意味で、ここでの判断はいわば〈反省的〉。〈見るⅢ〉は感性的であるか否かについては、〈見るⅠ〉と〈見るⅡ〉を両肢的に含む。全24の用例中3例を除き全て現在形(歴史的現在も含む)。それは〈見るⅡ〉のはたらきを拡張する面をも持つ——〈見るⅡ〉の現在完了形に關係しその現在性を代表するものとして、また未来形に關係しその現在化¹⁴を遂行するものとして。使用形態が現在形でありつつ、同時に字義的比喩的な隔たりの意識をも伴う、不思議な語感のもとに使用されている。

B 三種類の「見る」の、第20章での用法

1) 大梓の対照

Ἐωράκαμεν τὸν κύριον (V.25) 〈見るⅠ〉を根拠にした(V.20)、告白・証言(〈見るⅡ〉)

Ἐώρακα τὸν κύριον (V.18) 〈見るⅢ〉を始元に持つ(V.12, 14) 経験による、告白・証言(〈見るⅡ〉)

〈見るⅠ〉とか〈見るⅢ〉とかによる体験が先行し、〈見るⅡ〉はこれを解釈して(自己に、そして他者に)言表する言語のようにみえる。

2) <見るⅢ>における対照 (V.1-18)

愛弟子、ペテロ。墓に入る、<見るⅢ>をはたらかせるも (V.6) イエスに出会うことなく、「物」を見て (<見るⅠ>) 信じる (V.8) /

マグダラのマリア。泣きながら外から伏して墓をのぞく、<見るⅢ>は前方へ (V.12) と後方へ (V.14)、イエスに出会う。[マリアの「見る」(<見るⅢ>) については後述。]

3) <見るⅠ>における対照 (V.19-29)

トマスの<見るⅠ>はたんに感性的物的対象を見る(<見るⅠ>一般)というのとは異なり、「実地に見る (見て調べる)」というものである。それは信ずるに足るか否かを判断するためにまず実地検証を要求するものである。ἐὰν μὴ ἴδω ..οὐ μὴ πιστεύσω. (V.25) というトマスの発言は

⁶³⁰そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように ἵνα ἴδωμεν καὶ πιστεύσωμέν σοι; どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。

という姿勢と同次元のものである。こうした信じ得るための前提条件要求型の問題点はどこにあるのか。それは「しるし理解批判」としてのイエスの次の言葉の中に強烈に示されている。

⁶²⁶ イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく ζητεῖτέ με οὐχ ὅτι εἶδετε σημεῖα、パンを食べて満腹したからだ。

[「捜す」という術語にも注目せよ]

そもそも人間の行為は根本的には「神からか自分からか」¹⁶の二種類しかなく、<自分から>は端的に罪である。ひとは神に「引き寄せられ」父と子を「愛する」者とならしめられることによって<自分から>を<神から>へと転倒されない限り、「見る」対象の中に果てしなく<自分から>を投げ入れ続ける。「これがこうしてくれるならわたしは信じることができる」、「こうであることが確かめられなければわたしは信じる気になれない」。前提条件要求型の<見るⅠ>は<自分から>を肥大させることしか知らず、まさに<しるしを見る>という言葉のもとに満腹することのみを求めている訳である。<しるしを見る>とは本来、<自分から>を<神から>へと転倒させてしまったことを知るということであろう。「見ずして信ずる信仰」を勧めると言われている 20:29 の後半はこうした前提条件要求型の<見るⅠ>を否定するものである。前半の「見たから信じた」とは<見るⅠ>についてではなく<見るⅡ>について言われている。この<見るⅡ>は否定されているのではない。「あなたはそもそも父との一致においてわたしを見たから信じたのか」と、イエスはトマスの信仰が<見るⅡ>として十全であるかどうかと問い詰めておられるのである。二世代遅れてきたヨハネ共同体にとって<見るⅡ>の決定的な重要性が薄れる訳では決してない。<見るⅡ>に含まれている根本的な出会い体験なくしておよそ人格神信仰はありえない。物理的に不可能となりうるのは<見るⅠ>である (トマスをめぐる問題はその一面のヨハネ的強調)。ヨハネの時代に<見るⅡ>を継承し実現するのは<見るⅢ>を通して以外にはありえないこと、このことを「福音書」第6章—第8章のうちに叙述しようとしてヨハネは苦闘を続けるのである。

第2章 <中央三章>の構成と「見る θεωρεῖν」(<見るⅢ>)

第1節 「福音書」第7章第2幕の三重構造

1) テキスト表面での叙述

《表-3》第7章部分 (p.165) を参照されたい。第2幕内部で<フェーズ>と表記された部分に先ず注目しよう。その A, B, C の区別はそれぞれ第1景、第2景、第3景における「群衆」の中の二極関係 (新しい翼と守旧的な翼) が、その局面までのイエスの言葉によってどのように規定されているかを示すものである (第2景は B', B, B'' の三項構成、最初は B', B'' を無視して読まれたい)。

<フェーズ A>

⁷¹² 群衆の間では、イエスのことがいろいろとさきやかれていた。「良い人だ」と言う者もいれば、「いや、群衆を惑わしている」と言う者もいた。¹³ しかし、ユダヤ人たちを恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった。

<フェーズ B'>

²⁵ さて、エルサレムの人々の中には次のように言う者たちがいた。「…… 議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めたのではなからうか。²⁷ しかし、わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ。」

<フェーズ B>

⁷³⁰ 人々はイエスを捕らえようとしたが、手をかける者はいなかった。イエスの時はまだ来ていなかったからである。

³¹ しかし、群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、「メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなさるだらうか」と言った。

³² ファリサイ派の人々は、群衆がイエスについてこのようにさきやいているのを耳にした。祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを捕らえるために下役たちを遣わした。

<フェーズ B''>

³⁵ すると、ユダヤ人たちが互いに言った。「わたしたちが見つめることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行って、ギリシア人に教えるともいうのか。」

<フェーズ C>

⁴⁰ この言葉を聞いて、群衆の中には、「この人は、本当にあの預言者だ」と言う者や、⁴¹ 「この人はメシアだ」と言う者がいたが、このように言う者もいた。「メシアはガリラヤから出るだらうか。⁴² メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。」

⁴³ こうして、イエスのことで群衆の間に対立が生じた。

フェーズ A, B, C の三項の内容の推移はこのように歴然としている。こうして第2幕の三つの景は、群衆の間の両翼の潜在的対立が段階を追う毎に顕在化していく過程として進行していく。イエスの語りや群衆の間にどれほどの亀裂を走らせていくかがとりもなおさず舞台の場面推移のメルク

マールなのである¹⁶。しかしそれは単純な漸層法で叙述されているのではない。三段階の進展のうち第2段階の群衆描写自身が再びフェーズ B',B,B''と三項で形成されていて、B'は新しい翼に属する個々人の内面における対立・迷い・煩悶・葛藤であり (B'だけが個人の内面描写)、B''は守旧的な翼に属する諸個人相互の疑問のやりとりである。そしてこの両翼の対立関係が B に集約されている。〈フェーズB〉がサンヘドリンによる「イエス逮捕の決定」として決定的な転回点である。

2) テキスト裏面での叙述

テキストの V.31 と V.32 の間に上向きに鏡を立ててみる。《表-4》(p.167) は、このページ底辺に鏡面を上に向けて鏡を置いたとき、左欄の行がその真横の右欄の行に像を結んでいるとみたもの。読者は最下段の左右にあるそれぞれ三本の下線部の対応、次にその上の段の一本の下線部の対応を先ずつかんで欲しい。ここまでは地上におられるイエス。次にその上方にお違わしになった方(左・右)。その方のもとから来た(左)は降下—その方のもとへ帰る(右)は上昇。テキストの行が高ければ、イエスの立つ位置も高い。次に左欄上段に眼を向け、そこから下段に至り、右欄下段に移って上段に抜けていく手順で通読されたい。最初に (左欄上段)、イエスの語りの態様への驚きと「もしや？」の期待が始まる。あの方のもとから「来た者」として、イエスが群衆の中に降下していく次第¹⁷が鮮やかに (右欄と対照すれば下向はなおさら顕著に) 叙述されている。右欄最下段では地上での滞在を終えて、あの方のもとへと「帰る」イエスの上昇の道が語られ始める。イエスの向かう先について「おそらく…」と語られるが、その思いなしを掻き消すようにして、イエスの言葉の内容への強い疑惑が打ち出されて終わる (右欄上段)。左欄では「どこから？」と上方へ向かって問われ、右欄でも「どこへ？」とやはり上方へと問いが投げかけられている¹⁸。遥かな上方へと(テキストの行でも上方へと)左右に打ち開かれた・イエスの下向上向のV字型をなす・この構造体。われわれは第7章の中央に位置するこの構造体を「第1組鏡像体」、そのうちイエスの降下を表現する方を「右手」(テキストに向かって左側)、上昇を表現する方を「左手」と呼ぶことにする。一般に、ヨハネ「福音書」内でこのように右手・左手の鏡像体をもってイエスの入来・退去を鮮明に表現するテキスト配列法を「鏡像体配列法」¹⁹と名付けることにする。《図-1》左 (p.166) 参照。イエスの下向上向の移行経路をもっと具体的にもっと大規模に表現する「第2組鏡像体」・「第3組鏡像体」をわれわれはやがて見ることになる。それらは第7章の「第1組鏡像体」を対称軸にしてともにその「右手」を第6章に、「左手」を第8章に持つものとして前後対称的に書き込まれているのである。《図-1》右 (p.166) 参照。

3) 象徴的な暗示

《表-3》(p.165) 第7章部分のうち、第2景・第3景の中、左側に A,B,C,...B',A' と記号をつけた九つの項を参照されたい。「悪霊」「聖霊」の二つのテーマに挟まれたこれら九つの項は典型的な交錯配列法 (Chiasmus) のもとに叙述されていて、右下のように三行に分けて対応する項を結べば交錯してギリシア文字 X が書ける (Chiasmus の Chi はこの X のことである)。

因みに小学館版『バッハ全集7 ミサ曲、受難曲 (1)』では「口短調 ミサ曲 BWV232」のうちの〈グローリア〉、〈ニケア信経 (クレド) 〉の解説で、「前後対称的な楽章配置はすでに初期のカンタータの大きな特徴

A	B	C	D
		E	
D	C'	B'	A'

で、キリトおよびその受難の象徴として使用された。キリストの頭文字 Ch に相当するギリシア語の X とその十字架の形状からきたもので (以下 Chiasmus に言及) (p.41 土田英三郎執筆) あると語られている。このような象徴法をすでにヨハネ自身が用いていて、第7章第2幕におけるこの九項構成の交錯配列の交錯点をまさに「十字架の柱」と見立てる手法をとっている。結論だけとなるが象徴的な対応関係をわれわれは《表-3》(p.165) 第7章部分右側の [] 内に記入しておいた。これを通覧されたい。九つの項は受難物語全般の構成を象徴的に表現しているのである(第7章の三幕相互の関係や三項図式の分析は省略する)。 バッハの事例については《図-3》(p.170) 参照

こうしてヨハネは<フェーズB>を三重に叙述していることが明らかとなった。

表面で「サンヘドリンがイエス逮捕に踏み切る」という転回点、裏面ではイエスの下向上向の転回点(「第1組鏡像体」の核となる部分として)、そして極めて象徴的な形で、「十字架の出来事の中央」(第1組鏡像体をその中央に含む持つ「九項構成の交錯配列」の核となる部分として)。

さて、第7章にこのような三重の転回点が埋め込まれているのを確認された読者は次の一文をどのように読まれるだろうか。

筋の運びの midpoint 近くにクライマックスを設定するという、このような処理方法において、ローマの詩人たちは悲劇作法の基本に従っていたことになる。クライマックスが midpoint 付近に位置し、大団円が終わり近くに来るのである²⁰。

まさにヨハネ「福音書」は第7章を決定的な「中点」としている。《図-2》(p.166)、《表-7》(p.171) 参照。第7章を軸とするこのような前後対称な交錯配列において、第6章、第7章、第8章の複合体は決定的に重要である。この重要な単位をひとまとまりとして注目するためにわれわれはこれを<中央三章>と呼ぶことにする。《図-1》右側 (p.166) 参照。

それでは「中点」がなぜ第7章なのか。それは、仮庵祭の持つ意味とニサンの月 14 日とをヨハネが殊更に重視したからであると考えられる。仮庵祭について次のことだけを確認しておこう。

出エジプト記 23:14-17 は三つの収穫祭(種なしパンの祭り=大麦の収穫・アビブの月[最初の月・麦穂月つまりニサンの月のこと、3/4 月]、刈り入れの祭り=小麦の収穫・シワンの月[第3の月、5/6 月]、取り入れの祭り=ぶどうとオリーブの収穫(秋の雨乞いを兼ねる)・ティシュリの月[第7の月、9/10 月])を守るべきことを命じている。この三つの収穫祭はやがて、民を支えるヤハウエの恵みとイスラエルの苦難を想起するものとしてそれぞれ、遍越の祭り=イスラエルが神によってエジプトから救い出されたことの祝い、七週の祭り[ベンテコステ]=シナイ山における律法授与の記念、仮庵の祭り=四十年間にわたる荒野放浪の幕屋生活とその底辺からの終末的な民の集い出現への希求を想起すること、へと転化した。仮庵の祭りはこの三大巡礼祭の全体を総括する最大・最重要なものであり、その際だった特徴は喜びの精神の横溢(申 16:11, ネへ 8:17)、祭りにおける民衆の自由の容認であった²¹。祭りは第7の月(ティシュリの月)の十五日(秋分に近い満月)から七日間(後に一日追加)行われ、毎日一回シロアムの泉から水を汲んで祭壇に注ぎ、雨乞いの祈りが捧げられると共に民衆は棕櫚の枝(など)を振って彼らの共同の喜びを表した。祭りの最後の

日（第7日）は灌水の儀式は七回行われた（7:37 は第7日）。また祭りの期間を通じて神殿ではランプが灯され、神殿の明かりが町を照らした²²。

ところでまた、過越祭準備の日、神殿で犠牲の子羊が続々とほふられ始めるその最初の時刻にイエスが処刑されたニサン14日金曜日。この受難の日14日は前夜の日没から始まり、このとき告別説教があった。ヨハネは第14章を告別説教にあてている。仮庵祭での数字7の著しい強調と「福音書」第7章、ニサン14日の告別説教と第14章——この7と14という数字は最初から彼の構想の中に取り込まれていたに違いないと思われる。

なおイエスの弟子たちがイエスの受難に遭遇したことの〈想起と反復〉をヨハネ「福音書」は根本テーマとするものであるとわれわれは考えるが、このテーマがヨハネをして「祭り」（特に荒野での苦難の〈想起と反復〉である仮庵祭）を重視させたのだと考えられる。「祭り」とは民衆共同の〈想起と反復〉の最高形態だからである。

第2節 「福音書」第6章とカタバシス・アナバシス （要点略述）

鏡像体配列はカタバシス・アナバシスの神学をテキスト表面に強調して提示したものである。

「第1組鏡像体」の分析に際し、その「右手」にイエスの降下を「左手」にイエスの上昇を見られた読者は誰も、（ヨハネ神学の概論提示部である第3章の講話での）次の一節を思われたことであろう。

³³天から降ってきた者 *ὁ ἐκ τοῦ οὐρανοῦ καταβάς*、すなわち人の子のほかには、天に上った者は誰もいない、*οὐδείς ἀναβέβηκεν εἰς τὸν οὐρανόν*

³⁴そして、モーゼが荒野で蛇を上げた *ὕψωσεν* ように、人の子も上げられ *ὕψωσθαι* ねばならない。

下向・上向の結合の強固さに促されて、（「福音書」の物語の全体を予示する）第1章末尾の、

¹⁵¹天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りする *ἀναβαίνοντας καὶ καταβαίνοντας* のを、あなたがたは見ることになる。

を口にされた人もあろう。

カタバシス・アナバシスの結合とえば、ガリラヤとエルサレムの間でのイエスの往復運動もそうである。第7章に至るまで、イエスはガリラヤに下るとそこで大きな奇蹟を行い、そのあと必ずエルサレムに上る（そしてユダヤ教の根幹に向けた攻撃をする）。

「（ヨハネの証言）・弟子召命」=「第1のしるし」=「宮潔め・（神殿攻撃）」

「（サマリアの女の証言）・サマリア共同体・対弟子説教」=「第2のしるし」=「足の不自由な人のいやし・（神を自分の父と呼び自身を神と等しい者とする）」

どちらの場合も〈ガリラヤへ〉という空間的カタバシスは、〈証言の核となる体験〉と〈証言の伝播〉そしてこの両者を踏まえた〈共同体形成〉という盛り上がり方をイエス・キリストと共に風のように〈ガリラヤへ〉運んでいる。

「供食物語Ⅰ・湖上歩行」＝「供食物語Ⅱ」＝「飯庵祭三説教」。

この第1項は——空間的カタバシスの運動の方向を<カファルナウムへ> (6:13, 24,59) と絞った上で——まさに上記共同体形成の風 [証言の核となる体験 (Vgl. 6:14)、共同体形成の盛り上がり (Vgl. 6:44)] を送り込む空間的カタバシスそのもの。ティベリアス・ガリラヤ湖東岸の山・カファルナウムという V 字型の移動——下向・しるしの業・上向の三契機の範型の適用＝空間的なカタバシスの最終目的地がカファルナウムであることの強調。

「第1のしるし」の後：「イエスは母、兄弟、弟子たちとカファルナウムに下って行き、そこに幾日か滞在された」(2:12)。「第2のしるし」：イエスはカナに留まったままでカファルナウムに臥す男児の遠隔治療。カファルナウムの王の役人 (6:15 との関連に注意) が自分の家からカナのイエスのもとへと懇願に上り、イエスの言葉を信じて、カファルナウムのわが家に向けて「下る」²³。第6章第2幕：イエス自身がカファルナウムに下りかつここで<第3のしるし>²⁴ (「パンの形態」での到来) を現す。「第2のしるし」が人々のしるし理解の批判 4:48 によって先行されていたように、「供食物語Ⅱ」はしるし理解批判 6:26 を露払いにして本論が語り始められる。これは確かに、<第3のしるし>と名付けるべき重大なしるし物語であり、裁きの業の物語なのであるがそれをめぐる議論はここでは割愛する。カファルナウムへの下降＝パンの形態での下降＝「受肉」の完成。

第3節 「福音書」第8章と「先取りされた告別説教」

《表-3》第6章、第8章部分 (pp.165-6) 参照。ここに星印で記入してある鏡像体を一覧する。先ず「第2組鏡像体」。《図-1》右側 (p.166) もあわせて参照されたい。読者は《表-5》を p.169 を最下段から上段へ向かって、次に p.168 に帰ってこのページの最下段から上へ向かって、左右を対比しながら読み進めたい (8:23 行頭・印は一行毎に上へと改行していることを示す。なお、鏡像体「左手」最下段 8:12 と 8:19 との間には「光と証」のテーマが介在している結果、ここに配列の乱れがあることを指摘しておく)。どうであろうか？次に鏡像体「右手」との対照を離れて、「左手」(向かって右の欄) だけを最下段からもう一度読み直されたい。

視線が最上段 (8:29) に至った段階で眼をここに止めて欲しい。この節は確かに死に赴くイエスの言葉である。イエスの退去・上昇が語られているのは確かである。しかし死ぬ者の側の<この場から>の移動は全く表現されていないのも事実である。実はこの場面での「わたしをお遣わしになった方」は二重となっているのである。テキストの表面ではこの方は「父なる神」であるが、裏面ではこの方はイエスその人なのである (4:38,17:18,20:21 Vgl.7:18,13:16)。だからこの節 8:29 で語っている「わたし」は、神がイエスに「お与えになった人」、イエスを信ずる者なのでもあって、「わたしをひとりにはおかせない」とはイエス不在の間の中をイエスを呼ぶ弟子の叫びでもあるのである。これは「左手」の<人の子が上げられた(8:28)>以後の事態＝高挙の叙述部分である。これに対応する「右手」の<人の子が天から降ってきた(6:38)>以前の事態＝先在を表す愛の誓い部分 6:37 の「わたし」も同様に二重化されていると考えるべきであろう(「第2組鏡像体」の最上部に位置する先在＝高挙のテーマは「第3組鏡像体」に表現されている。「第2組鏡像体」の最下部は地上にある人の子・イエスの愛としての現臨＝「命のパン」・「世の光」が表現されている)。この「左手」最上部を見据えていて読者はきっと思い出されることだろう。

14:1 「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。14:2 わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。14:3 行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。

14:18 わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない οὐκ ἀφήσω ὑμᾶς ὀρφανούς。あなたがたのところに戻って来る。

14:28...わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る τὸν λόγον μου τηρήσει。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む (Vgl.14:15)。

こうして読者は、鏡像体の「左手」を下から読み上がる途上で感じ取られていた予感がいまや確信となっていることに気づかされていることだろう——この語りは紛れもなく「告別説教」である²⁵。「バラクレートスの派遣」が語り出される、あの息づかいまでもが感じられる。

わたしはあなたをひとりにはしておかない οὐκ ἀφήσω σε μόνον!

——先取りされたイエスの「告別説教」を貫いて鳴り響いているのはこの声である。

第4節 『わたしはある ἐγὼ εἰμί』の神学の生誕地

わたしがこれらのことを話したので、あなたがたの心は悲しみに満たされている。(16:6)

「はっきり言っておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。」(16:20)

イエスの退去された後の「不在の闇」、この暗闇の中に佇み「泣いて悲嘆に暮れる」者たちへのみイエスのあの痛切な「告別の声」が届く。

わたしはあなたをひとりにはしておかない οὐκ ἀφήσω σε μόνον!

ここで上掲「第2組鏡像体」において「右手」の6:38-39を踏まえれば、イエスのこの「告別の声」は「父が子のもとへ引き寄せる」(6:44)働きの・イエスにおける示現・であることがわかる。

「子のもとへ引き寄せる」作用力に浴していない者の誰が、その当の「子」の喪失を嘆くだろうか。信ずる者を「子のもとへ引き寄せる」父の「御心」(6:37-40)は「子を遣わす」として地上に働き始めるが、その働きがこの人たちの「復活」として実現する(「右手」)のは、イエス「不在の闇」の悲しみにおいてこそ(「左手」)であるとされている。

この鏡像体における「右手」の6:44-46と「左手」の8:21γ-αの対応関係そのものが問題の根幹を示している。信じているつもりの方²⁶は、「左手」の「わたしは去る、あなたたちは自分の罪のうちで死ぬ、あなたたちは来ることができない」という言葉を決定的なこと、自分にこそ向けられた言葉として反芻することはないだろう。根本的なことは、イエス退去後の「不在の闇」の中では「罪のうちでの死」が必然である(8:21β)ということである。この必然性を受け止めること(=罪のうちで死を味わうこと)の中でこそ『わたしはある ἐγὼ εἰμί』が信じられる(=その人が復活する、新たに生まれる、8:24β auch 6:40)道が開ける。

鏡像体「左手」に語られている『わたしはある ἐγώ εἰμι』ということ信じるとはだれか。それを「右手」の対応箇所が端的に説明している——「子を見て信じる者 ὁ θεωρῶν τὸν υἱοῦ καὶ πιστεύων」(6:40) がその人である。「子を見る θεωρεῖν」ことがどこでいつ決定的に生じるかについては、「左手」がこれを語っている。「人の子が上げられる」という出来事がそれであり(Vgl.12:27-36)、そのとき『わたしはある』ということと「父に教えられたとおりに子が話す λαρεῖν」ということが知られるのである(8:28)。以上の次第で、「子を知ることにおいて子の父を知る」(8:19 auch 6:47) こと——それはこの鏡像体が鮮明に示している如く、「子の業において父の御心を知る」ということに他ならない——が成立する。

このようにして<中央3章>において、われわれのいう<見るⅢ>に基づく<見るⅡ> (小論第1章第2節B1) 第2項(p.144)が語り出された。<見るⅢ>としての「見る θεωρεῖν」は、このような文脈の中ではじめて²⁷術語として確立したのである。

ところで「人の子がもといいた所に上るのを見る θεωρεῖν」ことがもたらすつまずきは「イエスが命のバンであるという告知」を前にするつまずきよりも遙かに大きいことを、ヨハネははっきりと語っている(Vgl. 6:46-63)。それはそうであろう。するとヨハネの叙述の成否の分岐点は明らかである——「人の子が上げられる」という出来事が理解困難ではある(6:62)が、これが如上の認識の出発点となりうるしまたなるべきであることを鮮明に提示すること、これである。われわれは彼の叙述の工夫に迫る手だてとして、6:62 が「第2組鏡像体」の「右手」部分(6:37-50)の後に記述されていることを重大な手がかりにすることができる。この「右手」部分が理解できないなら、なおさら「左手」部分を理解できないだろう——これが6:62の論旨である。ヨハネは「右手」「左手」を一つのものとしてなら掴みうることを、カタバシス・アナバシスの反復こそを理解すべきことを、対称的な反照構造において提示したのである。その概要はわれわれが上で見たとおりである。

小論第2章第2節冒頭(p.149)を参照されたい。この3:14は『民数記』の

²⁸主はモーセに言われた。「あなたは炎の蛇を造り、旗竿の先に掲げよ。蛇にかまれた者がそれを見上げれば、命を得る。」

²⁹モーセは青銅で一つの蛇を造り、旗竿の先に掲げた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た。

に由来する。これを踏まえ、罪のうちに沈む人も、「上げられた」人の子を「見上げれば」、「命を得る」とされるのである。ここに「上げられる」とはまず第一に「旗竿の先」のようにして「十字架」に上げられることであり、第二に復活・昇天としての高挙を意味する。このようにして「上げられる」は「(仰ぎ) 見られる」を含んで使用されている。「福音書」第8章からイエスは「上げられる」道を歩み始められる。それは「見られる」道の開始でもあることが次のような文章構成のうちにも示されている。

次ページの表で、第5章の、イエスの言葉を「聞いて」永遠の命を得る(5:19-29)というテーマが下降し具体化して、第6章では、イエス(の肉)を「食して」永遠の命を得る、というテーマに至っていることが示されている。この対照表の「右手」と「左手」を比べれば、イエスの歩みが上昇に転ずることによって基調も今や「見られること」に転化していることがはっきりと理解できよう(これをもとに第10、11章の基調は「聞き分けられる」、「復活」。なお第5章は本来は聾啞者のいやし)。

第5章 足の不自由な人のいやし

「わたしの言葉を聞く者は永遠の命を得る」

第6章 わたしは命のパンである

<最後の晩餐>

第7章 仮庵祭三説教

<受難物語全般>

第9章 盲人のいやし

「見えない者が見えるようになる」

第8章 わたしは世の光である

<告別説教・大祭司の祈り>

「人の子が上げられる」とき「子を見て信じる者」とは誰なのかをもう少し詳しく追跡しよう。このことを、「子を見て」父と子の愛の一致に与ることのできる者は誰か、というふうに問うてみれば、その答えは上の考察からすでに知らされている。父が子のもとへと引き寄せられたからこそイエスの喪失を嘆く者、がその人である、と。

その人は『わたしはある』が信じられる。なぜか？ なぜなら子のもとへ引き寄せられた人は、子の掟と言葉を守る²⁸だろうからであり、そのことによって子を受用するからである。イエスを受用する者のみが『わたしはある』と出会うことができる。

わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを受用する者である。わたしを受用する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す *ἐμφανίσω αὐτῷ ἑμαυτόν* (14:21, Vgl. 14:24)

これを逆方向から言えば、神とイエスへの「愛」があるのでなければイエス（を通した神）の「言葉」を受け入れることはできない (5:42, 8:42)。

ヨハネ「福音書」でバラクレートスが初めて語り出される場面である「第1告別説教」において、イエスは「父のもとへ行く」と語られた後、「わたしの名を呼べ」と話されている。

^{14:18} わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。¹⁴ わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。¹⁵ 「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。¹⁶ わたしは父にお願いしよう。父は別のバラクレートスを遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。

われわれはバラクレートス *παράκλητος* を、「傍らに *παρά*」「呼び求め *καλέω*」られた者と文字通りに解する。誰が呼び求めるのか？ イエス不在の闇の中で「泣いて悲嘆に暮れる」者である。何と言って呼ぶのか？ 「イエスよ！」と呼ぶのである。呼び求める側の言葉に呼び寄せる力があるということか？ 呼び求める声は全く無力であるが、これをイエスは必ず聞き取って下さり、父なる神へのイエスの願いは必ず聞き入れられ、「一人も失わない」とする父と子の愛の誓いにおいて、呼び求める声の傍らに必ず慰め手が到来される、ということである。

ちょうどそのように、「わたしは去る、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬ、あなたたちは来るができない」(8:21) が言葉通りに自分に降りかかっていると悲嘆に暮れる者の傍らにこそ『わ

わたしはある』が——愛の呼応 *Entsprechung* として——示現する ἐμφανίζεω とヨハネは言う。「第2組鏡像体」の「右手」上方に強調された「意志」、「御心」は、この「愛」とともに(形成されていく三位一体論において)聖霊の位格にある。

「見る θεωρεῖν」(〈見るⅢ〉)とは、イエスが不在であるということならびにその不在を泣き悲しむ者がいるという前提のもとで、この泣き悲しみ呼び求める者に対して『わたしはある』が呼び求めに応じて示現するのを「見る」ということである。

われわれの〈自分から〉の何かがポジティブにこの「見る」の成立条件を構成していると誤解してはならない。われわれは悲しみ恐れるだけなのであり、われわれを「子のもとに引き寄せ」、われわれを父と子を愛する者とさせ、われわれに届いた愛ともとの愛との呼応のうちに示現が出来るのはすべて父と子の側の「一方的な働き」である。

〈中央三章〉の「第2組鏡像体」のなかでヨハネが「見る θεωρεῖν」(〈見るⅢ〉)をこのように定式化していることを、われわれは確かめることができた。驚くべきことにこの定式もまたマグダラのマリアの θεωρεῖν〉の「先取り」なのである。《表-8》(p.171)を参照されたい。

第5節 「第4のしるし」と「見る θεωρεῖν」(〈見るⅢ〉)

《表-8》にはヨハネの痛切な祈りが込められている。マグダラのマリアは「天使たち」に向かっても、そして自分が「園丁だと思った」男に向かっても、同じ一つの事を繰り返し繰り返し言うことしかできない。イエスが取り去られた、どこにおられるかわからない²⁹。ヨハネの最大の訴え。イエスの不在を真に悲しむマリアのこの姿とその帰結——「マリア!、愛の呼応。そして「ラボニ!」。

「泣きながら身をかがめて墓の中を見る」(20:11) ことが「泣きながら跪いて十字架を見上げる」ことを意味する以外は、二世代遅れてきたヨハネ共同体の一人一人に求められる祈りとマリアの祈り、両者の「見る θεωρεῖν」(〈見るⅢ〉)に違いがあるはずはない、とヨハネは考える。イエス不在の暗闇に呑み込まれ尽くす者だけが、『わたしはある ἐγὼ εἰμί』の光を受けているのである。

われわれの第2組鏡像体はその基盤に二つのメタファー文

ἐγὼ εἰμι ὁ ἄρτος τῆς ζωῆς —— ἐγὼ εἰμι τὸ φῶς τοῦ κόσμου

が向かい合っている。《図-1》右側(p.166)参照。流れとなってきたキリスト教運動の内部での人の子・イエスの「現在」を最も強く語り出すメタファー文は「わたしは命のパンである」である。これは従来の運動体の枠内で理解可能である。しかし最もヨハネ的なメタファー文「わたしは世の光である」はそうではなからう。ヨハネ神学は前者は後者によって根拠付けられなければその生命はないとし、逆に後者は前者なくしては現実たりえないとしているのであろう。対称軸第7章を中心に〈中央三章〉において、これらふたつのメタファーたちは、互いに反照し合い根拠付け合うようにして交響し合っていることになる。その交響の上に全ての思惟空間が乗っている。読者はカタバシス・アナバシスの反復運動を身体にも伝え続けるほどのこの対称的で搏動的な空間で、人の子・イエスの道を繰り返し辿り続ける。この瞑想・反省の空間を創出することで著者ヨハネは、「第4のしるし」(イエス・キリストの「光のアスペクト」での到来)にふさわしく物語を荘厳したことになる。第8章第1幕 V.12-20 が「第4のしるし」を叙述しているのではなく、この反照し合う構造が³⁰このしるしの示現なのである。およそ最も成功したメタファー文の繫辞は、最も深い

存在の在り方を表現するものである。反照し合う一組のメタファーたちの εἰμίは前代未聞の「ある」を語り出す「存在詞のはたらき」³¹を發揮する。両者のなかの二つの εἰμίは、愛の極限的な重さ、光とさえなったそれ、の入射を意味している³²。この二つの εἰμίをいわば底辺にした正三角形のその頂点に立つ εἰμίが、『わたしはある ἐγὼ εἰμί』のそれである。

さて、第6章第2幕第2説教 V.34-51b のテーマは「第3のしるし」（イエス・キリストの「パンの形態」での到来）であり、その示現の場所がカファルナウムであったが、いまや「第4のしるし」の示現の場所はエルサレムの、しかも神殿境内である。ガリラヤへの下向・しるしの業・エルサレムへの上向（ユダヤ教への攻撃）というイエスの往復行為がここで最終局面に達する。これ以降の第9-12章は、イエスの真理開示の言葉と業の一つひとつがユダヤ教の根幹への痛撃でもあることを叙述していくものとなる。それはイエス受難の道がますます険しくなることの叙述でもあろう。

「第4のしるし」に関してもっとも重要なことは、このしるしによってはじめてヨハネ共同体の「新しい真なる神の到来」が完成したということである。キリスト教運動一般のなかでは様々な<形態>での神の現在が語られてきただろう。ヨハネはその多様な<形態>を貫く<真理>として、「光のアスペクト」での神の現在を語り出そうとする。多様な<形態>を内包しかつどの<形態>へも融通無碍に転換できる³³<先・形態 Präfigurierung>としての「光のアスペクト」。この意味での<先・形態 Präfigurierung>をわれわれは第1章第16節の πλήρωμα と結びつけて理解したく思う。この<充滿した最高の存在>は常に死に曝されているという逆説³⁴の直中にある。

わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならない、とどうして言われるのですか。(12:34)

8:12-20 と 12:27-36 とは「光の現在として粹をなす」とわれわれは理解する。テキストのこの範囲においてこそ、最高存在の自己否定の歩みが明示的に叙述されているからである。最高存在の自己否定という最高の逆説を「恵みの上の更なる恵み」(Vgl. 1:16)と知る時に光が射しているのである。 πλήρωμα の示現態としての人の子・イエスが歩む受難の道——その究極の十字架を同道する弟子たちが「見上げる」こと。この過程で弟子たちの根底で突き動いていたものを反省的に開顕させていき、それを追体験しつつ反復することこそがヨハネ「福音書」の根本テーマである。ルカの場合の、イエスの『長い旅』とイエス昇天を弟子たちが見上げるというテーマとの並行関係が見据えられるべきである。

因みに「暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに」(12:35)とは、生成・消滅のいわば水平時間のうちで表現されているとはいえ、光がある／ないの狭間からのみ窺える真の命の光(白道、油断すればすぐ掻き消えるそれ)をのみ頼りにして、という意味に解すべきであらう。「イエスは行かれる、どこへかはわからない」という反復され続けたテーマも同様である。イエスがおられる／おられないの狭間からのみ窺える『わたしはある』を「見る θεωρεῖν」(<見るⅢ>)のように、ということである。上記「見る θεωρεῖν」(<見るⅢ>)の定式の前提条件である「不在の闇」というテーマをいわば垂直の円環<時間>のなかでの事柄へと転倒させて理解するときに初めて、

「見る θεωρεῖν」(＜見るⅢ＞)は「かの時」に遅れてきた読者たちにとってもくいま・ここでの事柄>として実践的なものとなるのである。「第2組鏡像体」の「左手」に「告別説教」・「復活のイエスの、マグダラのマリアへの顕現」が「先取り」されていることの意味は、内環として回帰と反復とが可能な＜時間＞のなかでの事柄として叙述されているということであろう。第7章で「受難物語全般」が象徴的に示されていたことが思い出される。

第6節 始元を知る慶び

イエス不在の間の中でイエスのあの痛切な「告別の声」、

わたしはあなたをひとりにはしておかない οὐκ ἀφήσω σε μόνον !

を頼りに泣きつつ呼び求める者、その者の傍らへ愛の呼応として示現する『わたしはある』の光。この光がすべての創造に先立つ＜初めから＞あり続けているのだと初めて知るときの慶びはいかばかりであろうか。

Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος,

καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν

καὶ θεὸς ἦν ὁ λόγος. (1:1)

歡喜の祭りの行列、まさに手の舞い足の踏むところを知らずという歡びに沸き返る人々の踊り、こうしたものを思わせもするこの弾ける言葉のつらなりは、彼らが新しい真なる神を発見し出会ったことを告げている。これと全く同じ喜びも第8章にすでに書き記されている。それがわれわれのいう「第3組鏡像体(左手)」である。《表-6》(p.170)の一組の鏡像体について読者は、その(向かって左の)「右手」上段から三段階の下向を確認され、次に「左手」の下から三段階の＜上向＞を読みとられたい。

まずイエスの降下。ヨハネはキリスト教運動の記憶深部にある湖上歩行の伝承の中に、イエスの一方的到来を読み込む。「右手」の＜荒れる夜の湖＞は＜イエス不在の間＞と＜弟子たちの恐怖＞を、＜恐れるな＞は＜一人にはしない＞と＜恐るべき旧約の神ではない(伝承の転倒、出会いの瞬におけるイエスの弟子たちの恐怖は逆にヨハネの時の慶びを強調している)＞を意味している。ここに「見る θεωρεῖν」が成立している(6:19)ことも確認しておこう。

次に上昇。この鏡像体では「左手」と「右手」は車のこしきから出る輻(や)のように放射状に対応している(鏡像体最下部が地上のイエスを主題にしているのは他の鏡像体と同様である)。「右手」の＜既に暗いのにイエスはまだ来ておられなかった＞と「左手」の＜イエスの日を見るのを楽しみにしていた＞、「右手」の＜見て恐れた＞と「左手」の＜見て喜んだ＞。このような対応を踏まえるなら、「右手」の「わたしはある」に「恐れるな」が接続しているからには、「左手」の「アブラハムが生まれる前からわたしはある」は「喜べ」を言外に喚起していることが明らかとなる(ここでのイエスの退去は時間的な遡源となっている)。

ヨハネ共同体は自分たちの新しい神との出会いの慶びがかの時のアブラハムの喜びに通じているのを知る。さらにこの慶びの根はアブラハムが生まれる前の天に＜初めから＞張っていたのだと

知って、彼らはますます歡ぶのである。だからヨハネが「ユダヤ人たちは、石を取り上げ、イエスに投げつけようとした」と記すとき、彼は読者の慶びを意識しつつ共有しているのである。齒ぎしりする<ユダヤ人の憎悪>をしりえに神殿境内を去っていくイエスを幕切れに叙述する(まことに秀逸な7:10-11と呼応)ことによってこの卓越したドラマ作家は読者の感情を一挙に盛り上げる。

ヨハネ共同体のこの慶びは、彼らが「アブラハムが生まれる前から」の人の子・イエスの栄光へ参与していることの意識の現れである。鏡像体「左手」は「栄光論」(V.48-55)に接続して語られていて、第17章「大祭司の祈り」の次の言葉を背景に読まれるべきである³⁵。

17¹⁵ 父よ、今、御前でわたしに栄光を与えてください。世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光を。

直ちに付け加えたいことがある。「第3組鏡像体」「左手」のイエス退去のイメージが、「第1組」「第2組」の鏡像体の「左手」のものとは全く異なる、という点である。今までわれわれは入来されたイエスの退去の方向を無意識のうちに、昇天—神の右＝「ステファノの幻」(使7:56)の類のものとして視像化して捉えていた(その際イエスの実在感は弱まっていた)。ところが「第3組鏡像体」「左手」の<上向>では始元への遡源が強調されて視像化の方途が閉ざされ、その分、(ヨハネ共同体の慶びに包まれて)人の子の天での実在性が際立たされている。「第2組鏡像体」においてイエスの入来・退去の経路はいわばV字型をなして、鏡像体最下部には人の子・イエスの臨在を表現する「命のパン」「世の光」という二つのメタファーが、したがってその中の対応する二つの *ἐγώ εἰμι* が横に並べて記述されていた。ここ「第3組鏡像体」では対応する二つの *ἐγώ εἰμι* は「右手」の最下部(地上)と「左手」の最上部(天)とに分けて配置され、上述の車の輻(や)状の対応にも助けられて、イエスの経路が円環となっていることが鮮明化される。こうして人の子・イエスは形態化以前へと帰って行かれる。ここにヨハネ渾身の転倒が行われていると見なければなるまい³⁶。

先と高举との関係はヨハネ神学からはどのように論じうるであろうか。われわれは高举・「先在のロゴス」への還帰をまず「先・形態 *Präfigurierung*」への遡源と捉えることが必要であると考え。多様な<形態>を内包しかつどの<形態>へも融通無碍に転換できる、<先・形態 *Präfigurierung*>としての *πλήρωμα*。

信ずる者が言葉に出して呼びかければ、この *πλήρωμα* は始・中・終の円環のその場にふさわしい時の形態をとって信ずる彼・彼女の *θεωρεῖν* の前に立ち現れられるだろう。この *θεωρεῖν* の中に聞こえてくる *πλήρωμα* の声が、術語として成立した *λαλέω* である。この *λαλέω* は「第2組鏡像体」「左手」の上方に聞こえ始めてきている³⁷。

この *πλήρωμα* の光と声に全体的に与る「その日には、あなたがたは」(16:26)、ある／ない、見える／見えないの狭間を通して透かし見る必要はなくなっているであろう。その方向線を遙かに見据えた境涯から、永遠の命と光は端的に存在と無との絶えざる交替と語られるであろう。そしてこのような生命的な搏動のうちに祈りを込めて元型となるものを反復することにおいて初めて、「歴史に耐える」神学の論理空間が張り渡されていくのだと考えられる。

- 1 われわれは現在、『ヨハネ「福音書」における $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ の用法について——提示語分析試論』を執筆中である。それは「第1部 買頭三章について」「第2部 パウロとルカにおける $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ の用法について」「第3部 「福音書」〈中央3章〉の交錯配列と術語 $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ の成立」「第4部 術語 $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ とヨハネ神学」の四部構成である。その第3部では「福音書」第6章-第8章が前後対称=交錯配列の驚くべき構造を構成して、この結構に現れた反照構造においてヨハネ神学に独自の「見る $\theta\epsilon\omega\lambda\acute{\epsilon}\omega$ 」「話す $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ 」の術語が構築されている次第をわれわれは考察している。ここに提出する小論は術語「見る $\theta\epsilon\omega\rho\acute{\epsilon}\omega$ 」をめぐるひとつの問題点を焦点とし、必要な限りで関連する部分を要約しつつ、論述をすすめたものである。われわれの出発点にある問題意識は4:1-42のペリコペーの「サマリアの女」が行った絶対経験が何であったのか、4:25-26、なかつく $\acute{\epsilon}\gamma\omega \acute{\epsilon}\acute{\iota}\mu\iota, \acute{\omicron} \lambda\alpha\lambda\acute{\omega}\nu \sigma\omicron\iota$ は何をどういう場面で意味し現しているのかというものである。この箇所類似する 11:20-27、9:36-37 ではそれぞれが「奇蹟としるし」に直結することでひとつのまとまりをなしている。そのまとまりに劣らない内容を（随伴する奇蹟がないままに、かつテキストの「手前」での分析にとどまりつつ）われわれのペリコペーのうちに見いだすこと、これがわれわれの課題である。ところでわれわれが上記交錯配列に遭遇し、これを発掘する（それが発掘といえるものならば）こととなった発端は、「〜と言う」という語（われわれはこれを発話提示語と名付けた）の使用状況の分析にある。ここでのペリコペーで4:25-26よりも以前に、この語は必ず与格・対格付きで丁寧に繰り返されていて、その末字をとって並べれば、 $\acute{\eta}\nu\cdot\acute{\omega}\nu\cdot\acute{\eta}\nu\cdot\acute{\omega}\nu\cdot\acute{\eta}\nu\cdot\acute{\omega}\nu\cdot\acute{\eta}\nu\cdot\acute{\omega}\nu$ と対称的に並び、奇異の感が生じたことが始まりである。なお小論の今後の論述の前提として、われわれの「第1部」に関連して若干の事柄を（結論だけとなるが）ここに記しておくなければならない。「僕の形態」におけるイエス・キリストの到来は「第2のしるし」であってここから初めて「〈人間〉イエスの物語」が始まる。「神の形態」におけるイエス・キリストの到来は「第1のしるし」のときであるが、この段階ではまだイエスは〈人間的な〉行動をとることができない。「カナの婚礼」のペリコペーは、「神の形態」のイエス・キリストがガリラヤなる共同体=身体と「結婚」されたことを祝う祝典劇であろう。その直後の宮深めは、この新しく得られた「身体」がイスラエル中央を制覇するに至る新しい神殿樹立の預言行為。このように「神の形態」での到来にあつては「身体論」こそが叙述のテーマとなりうる。第3章は挙げてこの「神の形態でのイエス・キリストの結婚・到来」（「イエス生誕物語」批判）というしるしの総括ならびにヨハネ神学の宣言である講話。「第2のしるし」は家の教会の聖別の祝典劇がその「座」であろう。二つのしるしの並行性などについては小論第2章第2節ならびに文末脚注23でも述べる。なお、「神の形態」、「僕の形態」はフィリピ2:6-11に直接関連するのではなく、アウグスティヌス『三位一体論』第2巻1:2-3の問題にヒントを得て術語化したものである。
- 2 マルコの流れにおいては、福音書のテーマは福音、しかもイエス・キリストの福音の初めである。ヨハネは端的に初めに言があったとする。このすさまじい転倒のなかにヨハネの思惟のスケールが窺われよう。
- 3 それは対応第7段1:51に明示されている。参照、土戸 清『ヨハネ福音書研究』創文社 1994 p19。「人の子」とは「尊称」といっても、基本的にはイエス自身が自分を呼ばれる時の名である。信ずる者の側からは「人の子」を呼ぶとすれば「神の子」等々でなく「イエス」と呼ぶこととなる。伊吹 雄氏は福音書文学類型としてのヨハネ福音書の「執筆目的」として「イエスの名によって命を受けるため」と記されてある（対応第7段）ことの意味について、予感に満ちた考察をすすめられている。伊吹 雄『ヨハネ福音書と新約思想』創文社 1994 第6論文 この著書からわれわれは特に「語る」「見る」への注目を教えられた。
- 4 マグダラのマリアが墓の外にとどまった（これは $\theta\epsilon\omega\rho\acute{\epsilon}\omega$ の距離意識を示すものであろう）ことを含め、列王記上19:9-18の二回にわたる「エリヤよ、ここで何をしているのか」との何らかの関連を考えるべきなのかもしれない。
- 5 ここでヨハネが使用している視覚言語は初出の順に、 $\acute{\epsilon}\mu\beta\lambda\acute{\epsilon}\pi\omega, \acute{\xi}\acute{\iota}\delta\omicron\nu, \theta\epsilon\acute{\omicron}\sigma\mu\alpha\iota, \acute{\omicron}\rho\acute{\alpha}\omega, \acute{\epsilon}\acute{\upsilon}\rho\acute{\iota}\sigma\kappa\omega$ 、であるが、さらに $\sigma\tau\rho\acute{\epsilon}\phi\omega, \zeta\eta\pi\acute{\tau}\acute{\epsilon}\omega, \gamma\iota\nu\acute{\omega}\sigma\kappa\omega$ が各一回使用されている。
- 6 買頭三章で「明るさ」は、重厚なそれと薄明のそれとが交互に6種類提示されている。C・H・タルバート著/加山宏路訳『ルカ文学の構造 定型・主題・文学類型』日本基督教団出版局 1980 にはウェルギリウスの『アエネーイス』について「偶数の巻がきわめて強い悲劇的感情をもって迫り、奇数の巻は軽快で緊張を和らげる効果をもつ——このように交互に繰り返されるリズムがある」（p22）という記述があるが、のちほどわれわれが言及する、地中海文学のヨハネ「福音書」への影響という観点から、考えさせられるものがある。
- 7 土戸 清氏も、弟子召命物語の中の〈ガリラヤへ〉の動きに注目されている。土戸『前掲書』p16

⁸ おそらく著者ヨハネが眼前にしている資料はこの継承過程を非常にタイトに示していて、その流れを「カナでの婚礼」へと続けていたと考えられる。預言者ヨハネの「見る」を弟子たちが反復するこの流れの中で、イエスの「見る」が次第に浮き上がってきているが、それは著者ヨハネの筆であるのかも知れない。われわれの対応第6段の1:50における「見る」は、弟子が、ではなくイエスが、「見る」である。ここにはイエスに接する者の「見通されることによってイエスを見る」というテーマがあるが、いまはこれには関わらないでおこう。

⁹ 預言者ヨハネが張り渡すパラダイム空間の中でのみ「見る」のリアリティがある、ということ。イエスを地上に植え付ける預言者ヨハネの仕事。ヨハネ「福音書」はイエスと預言者ヨハネとの「同伴関係」を第10章末尾まで叙述している。それは何を意味しているのか？

¹⁰ 「福音書」全体での使用例は36。以下 () 内の数字は使用回数。「人を見る」(15)、そのうち「イエスを見る」(4)、「実地に見る(見て調べる)」(6)、「しるしを見る」(4)、そのうち「しるし理解の批判」(3—4:48, 6:26, 6:30)、「気付く、わかる」(3)、「イエスの目を見る」(2)、「霊がとどまるのを見る」(1)、「神の国をみる」(1)、「イエスの栄光を見る」(1)、「(広い意味での命令を含め)見よ、目で見ると云々」(つまり対象のレベルは確定不能:5)

¹¹ 「父、神を見た」(6)、「イエス(主)を見た」(6)、「イエスが神のもとで見たことを証する、話す」(3)、「イエスの業を見た」(2)、「アブラハムをイエスが見た」(1)、「霊がとどまるのを預言者ヨハネが見た」(1)、「血と水が流出するのを、愛された弟子が見た」(1)。ここでの「イエスを見る」の意味は、<見るI>の物的な対象に出会うのとは鋭く対立する。重要なのは「父とのつながりにおいて、だからいわば<父と子を結ぶ>霊・愛において「イエスを見る」ということ。

¹² これについては小論脚注27で論ずる。なお未来形 ὄψομαι での用例の残りは、「神の栄光を見るだろう」(1)、「命にあずかるだろう」(1)。

¹³ その他の用例。「イエスの業・栄光を見る」(2)、「しるしを見る」(2)、「父を見る」(1)、「真理の霊を見る」(1)、「天使を見る」(1)、「墓の異変をみる」(1)、「死をみる」(1)、「～であることをみる(除4:19)」(3)。

¹⁴ 14:19と16:16, 17, 19とを対比せよ。

¹⁵ 7:17, 7:18, 8:28, 12:49, 12:50, 14:10 これらの箇所では直接にはイエスの言葉と業が「父からか自分からか」というふうの問題となっている。しかしそれは同時にヨハネ共同体の告知、個々の信者の行動規範をめぐる言い方でもある。第3章、第6章にみられる天と地、霊と肉という「パウロに似た位相の二元論」が第6-8章を叙述していく過程で、申命記18:15-22(「自分から」については特にV.20-22)をふまえた「神からか自分からかの二元論」へと掘り下げられていったのだとわれわれは推察する。

¹⁶ 相手の反応を縫うようにしてイエスの言葉が走っていく様は、ルカ10:25-37(善いサマリア人)、同18:18-30(金持ちの議員)を思わせるものがある。

¹⁷ V.27-28は確かに強引な論法となっている。民衆の「どこの出身かをわたしたちは知っている ἴδαμεν πόθεν ἐστίν」というつぶやきを受けてイエスに大声で「どこの出身かをあなたたちは知っている ἴδατε πόθεν εἶμι」と叫ばせている。しかし「知っている」の内容はまったく異なる。相手の主張をまず受け止めてつぎにこれを転倒する、このヨハネの得意とする論法。

A 「イエスは誰か」 B 「どこの出身かをわたしたちは知っている」

... B 「どこの出身かをあなたたちは知っている」 C 「イエスはある方から違わされた者である」

<二重化された第2項>の一つの典型。われわれはここでは次の様にて、ヨハネの議論を認めることにしよう。命に関わる真なるものの認識は、民衆の「知っているという思い」からしか始まらない、と彼は見ている。つまり新しい認識は、旧来の神学パラダイムの中の知ではなく、ひとの直接体験についての知の意識(記憶)に依拠し、それを通路とする以外にはあり得ないということ。

¹⁸ イエスをめぐる「どこから」「どこへ」の問いが群衆の関心の根底になっていることに注目されたい。ヨハネ共同体にとって、イエスの道が新しい意味で円環を為すことを発見したことがどれほど重大であったか、それがここに示されている。

¹⁹ このような前後対称的な配列法は修辞学でふつう「交錯配列法 Chiasmus」(後述)と呼ばれている。われわれはこの交錯配列法 Chiasmus という術語も使用する。しかし「福音書」第7章V.25-36に典型的に見られるような、下向・上向の運動をひとつの単位に包含するかぎりの交錯配列法を特に鏡像体配列法と呼ぶことにする。その理由は第一に、それが人の子・イエスの地上への入

来と退去、降下と高挙とを、あたかも鏡面への入射と反射の関係のように表現していること、しかもそれをテキスト文面上の行の上下がイエスの立たれる位置の上下を表示するという形でさえ進行するものであるということによる。第二にそれは単純な入射反射関係でなく、(右手の鏡面に映る像は左手だが、左手の手袋に右手は入らないことから知れるように、右手とその鏡像たる左手の両者は「重ね合わせることが出来ない」——これは立体化学における「鏡像体」の説明の一部である——のと似て) 入来と退去との対称的叙述の中にむしろ両者の質的差異を含意しているものであること、この点をわれわれは重視したいからである。因みに立体化学はギリシア語の「手」 $\chi\epsilon\iota\rho$ に由来する chiral という術語を使用して上のような説明をしていくが、この例を踏まえ、われわれはひとつの組の鏡像体、ならびにその「右手」「左手」という言い方をするのである。さて、「福音書」第1章から第13章が第7章を谷間とするV字構造(つまり最大組をなす鏡像体)として叙述されている。この構造を承けてさらに、第14章から第20章も第17章を谷間とするV字構造(一組の鏡像体)として叙述されている(《図-2》、《表-7》参照)。この両者は相合して「福音書」文面全体の上に、字形wの結構を視覚的に浮き上がらせている。

ルカ文書における交錯配列法は早くから注目されているが、その研究の概観については参照、三好 迪『ルカによる福音書 枠空に歩むイエス』講談社 1996 pp.64-67。また詳細な事例はC・H・タルバート『前掲書』p.109以下を参照のこと。なお同書にはその第5章で西洋古典文学、イスラエル・ユダヤ文学における配列定型についての概観が記述されており参考になる。ところで、泉 安宏氏は共観福音書における洗礼者ヨハネについての叙述がそれぞれに交錯配列となっていることを明示されている(高柳俊一編『聖書のドラマに登場する人物』所収「洗礼者ヨハネ——共観福音書における神学的位置づけ」)。

²⁰ C・H・タルバート『前掲書』p.25 さらに参照、「地中海世界の文書は…全体を集約する中点を持つ。この事実は…ユダヤ教の著作についても妥当する。』『同書』p.219

²¹ サフライ/シュテルン編、長窪他訳『総説・ユダヤ人の歴史 下』新地書房 1992 p.95

²² 宮本久雄「仲介する第三者 ヨハネ福音書とブネウマ言語」『現代哲学の冒険5 翻訳』岩波書店 1990 p.382 なおこの論文からわれわれは、テキスト表面からブネウマの働きを読みとる視点を教えられ、さらに導入部に記された著者の根本的な問題意識に大いに励まされた。

²³ 帰途彼は奇蹟の実現を知る。実現したのは「きのうの午後一時」(4:52)であった。つまり「あなたの息子は生きる」とイエスが言われかつ男児が回復した(4:50,53)のは、ニサンの月14日に当てはめるなら、イエスが十字架上で絶命された時刻のこととなる。ある意味で、役人の信仰がイエスの業をわが家にもたらしたのだとも言える。そうすると「王の役人=病める子供の父親」はイエスの業を提示するドラマの「劇中劇」の主人公なのである。カナなるイエスの御心と役人の下向(カファルナウムへ!)は、天なる父の御心(Vgl.6:39-40)とイエスの下降(ガリラヤへ!)の「反復」である。イエスは「父から遣わされた人=罪に沈む羊たちの羊飼ひ」である。ここからも、「カナの婚礼」は、子を地上に派遣する(ガリラヤなる共同体との子の結婚)という天なる父の御業を提示するドラマの「劇中劇」であり、そこでのイエスは「二重キャスト」となっていることが予想されよう。一方のキャストはひとりの<人間>としての形態化を未だ得ていないのである。また、「役人の息子のいやし」の座が家の教会が聖別されたときの祝典劇であろうことも想像されよう。

²⁴ ある種のしるしに序数がつくのは、(その他の群小のしるしと異なり)それがイエスの地上での道で特別重要な意義を有するからである

²⁵ 「第1組鏡像体」の左上昇部分の分析の際にも既にうすうす感じられた読者もあろう。なお大貫 隆氏は「テキスト効用論的釈義の試み——ヨハネ 15・18-16・4aに寄せて——」『福音書研究と文学社会学』岩波書店 1991 pp.175-209において極めて精密で説得的な分析を提示されている。ここに15:18-25は「全体として回顧的、あるいは、反省的」15:26-16:4aは「全体として未来への予告」であることをふまえ、この結構のもとでのメッセージが読者に「福音書」全体の読みをどのように促しているかを考察されている。われわれは「福音書」第7章中央を対称軸とする上向下向の構造体がこのように「告別説教」に内蔵されているのを見るとき、逆にそれぞれの組の左右の鏡像体こそ<告別説教の視野>によって構想され得たものであることを知らされた。

なお「告別説教」においては<予告>は<記憶の喚起>であることにも注目したい。イエスの弟子たちがイエスの受難に遭遇したこと<想起と反復>——これを新しい真なる地平で進行することの指針が「告別説教」で提示される、という意味で。

²⁶ 第8章では「信じたつもり」の批判はまだ顕ではない(8:26a, 8:31a)が、第9章ではそれははっきりしてくる(9:40-41)。イ

エスの批判は表面は「ユダヤ人」に向けられているが、同時にキリスト教運動内部へと投げかけられているのは当然である。

²⁷ 「福音書」〈中央三章〉の緊密な結合関係の中でヨハネが、〈「子」を「見る θεωρεῖν」ことによって信ずべきこと (6:40)〉を強調し、これとの対比で、「人の子」のパンの形態での降下につまずくなら、〈「人の子」の上げられるのを「見る θεωρεῖν」ことによってなおさらつまずくだろうとの警告 (6:62)〉を第6章に記述し、第8章に、〈(仰ぎ見られることによって自らのもとへと包摂する意味での)「上げられる」(8:28)との関連における「人の子」〉を記述し終えたとき、彼はヨハネ神学の「人の子」、「見る III」としての θεωρεῖν (そして λαλέω) の術語化を達成したのである。未来終末論の地平で「人の子」を未来形で ὀράω (ὄψομαι) というものの流れがここに転倒された。小論第1章第2節「A 三種類の『見る』の、ヨハネ福音書での用法」(2) ὀράω (p.144) の B 群はヨハネが未来終末論をまず受け止めたことを示し、A 群はこの未来を、つまり未来終末論的な「人の子を見るだろう」という未来を、「イエス不在の間——ここではイエスは〈見えない (θεωρεῖν) の否定形〉——」を潜った後の〈未来〉へと、つまり現在終末論が約束する未来へと、ヨハネが改釈し転倒したことを示している。後者は、イエスがおられる／おられない狭間から『わたしはある』の示現を見る、というふうにとまめられる〈見る III〉の実現の約束である。θεωρεῖν を Präfigurierung との関連に位置付けるに当たっては、〈6:62 においてヨハネが「人の子」を「先在のイエス」の位置にまで突入せしめた〉ことの大貫 隆氏の指摘が参考となった。同氏著『ヨハネによる福音書 世の光イエス』日本基督教団出版局 1996 p210 [未来終末論の観点からもととは、「人の子」は ὀράω の未来形と結合していたことの実例が土戸『前掲書』p247 Anm. 21)に示されている。]

²⁸ よく使われる「言葉を守る」という術語は、たんに「掟を守る」と等価の、行動規範に関連する言葉であるに過ぎないのであるか。祈りの言葉は「守る」の対象とはならなかったのだろうか。定式化された言葉をく練り上げるようにして唱え続ける>瞑想法の修煉が、「言葉を守る」という語法に内包されていないだろうか。5:39 は言外に、瞑想の実習を伴わないままの聖書研究を否定しているようにも聞こえる。

²⁹ これは「イエスは去られる、他の者はそこへは行けない、見えない」というヴァリエーションのもとに第7章の「第1組鏡像体」(「左手」、第8章の「第2組鏡像体」(「左手」)に一貫している根本テーマであった。それは 13:33-36 でも語られ、また 14:5、16:10、16:16-18、17:11 にも同じテーマが含まれている。

³⁰ 「第1のしるし」と「宮潔め」との関係に鮮明に見られた事態と同一である。福音書世界で「裏付け引用=反照的引用 Reflexionszitat」といえば(旧約)聖書からの引用であり、それによって根拠付けが行われる。「第1のしるし」においては「反照的引用 Reflexionszitat」がキリスト教運動内部の〈記憶〉からの「引用」=宮潔めとして行われていると考えるべきである。「〜と言う」を表す発語提示語を「福音書」第2章において分析してみると「カナの婚礼」は λέγω の現在形の本槍(一カ所だけ接続法、あとは直説法)、逆に「宮潔め」はほかの動詞を含めて歴史的現在に皆無という事実がある。このまことに異様な対比から、「宮潔め」のペリコペーの全体そのものが、「イエス・キリストの到来・結婚」の喜び(歴史的現在ではなく現在そのもの)への「反照的引用 Reflexionszitat」であると思われる。つまりイエスの「弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し」(V22)と記されているが、ここでみるべきは、著者ヨハネはイエス・キリストの到来を祝うヨハネ共同体の祝典の叙述の中で反照的に「宮潔め」の出来事そのものを思い出している(=喜びがそれによって根拠づけられ倍加している)という点である。つまり(登場人物による)回想が生じたとき、叙述されているのはその回想の場そのものが(著者によって)回想されたということの方なのである。この叙述が「反照的引用 Reflexionszitat」の役割を果たす。「エルサレム入城」における(弟子たちによる)回想の場の叙述を介しての(著者による)回想の叙述も同様。イエスの受難前の物語の最初と最後を(「聖書」だけでなく)キリスト教運動の深部の記憶によって根拠づけるということであれば、著者ヨハネの「キリスト教運動の反省」という視点は方法的にもまことに筋の通ったものとなる。それどころかヨハネ「福音書」は、反照されるべき根拠・意味付けを、「聖書」や「キリスト教運動の記憶」にとどまらずヨハネ「福音書」そのものに求め、こうして反照の円環を閉じようときえしている。告別説教に多発し、λαλέω 活躍の場面である「これらのことを話したのは ταῦτα λελάληκα ὑμῖν ἵνα (15:11, 16:1, 16:4, 16:33) 等々の語りがそれである。

³¹ われわれのメタファー論攻究にとって、リクールもユンゲルもそれぞれの角度から「存在」を研究究極のテロスとしていることが最も参考になり、励ましになった。佐々木寛治「メタファー過程によせて」(「十字架上のメタファー」『川崎医学会誌・一般教養篇』第20号、1994、pp91-114

³² こうして第2組鏡像体「左手」の8:21はその対応箇所6:44-46と逆説的に一致すると言ふべきである。

³³ われわれは、大貫 隆氏の「全時」概念に（しかも特に、テキスト個々の場面への照射の当て方、それらの取り纏め方に）根本的に依拠している。

³⁴ このような $\pi\lambda\eta\rho\omega\mu\alpha$ が人の子・イエスによって人格的に代表される限り、「受難物語」はイエスその人の正真正銘の受難を表現している。この受難を最高の従順による最高の主体的意志をもって選択するイエスの能動性は、受難の受動性という基盤が強固であるからこそ意義深いことであるとわれわれは考える。イエスの受難に、自らの存在の最終的な危機として弟子たちが遭遇すること、その危機を体験すること——ヨハネ「福音書」の存在理由。「神の存在は最高にレアルな、決して弁証法的とはならない底の脅威を無から受けているのだということ、このことが主題となるように神の存在を語ること、このことを強調しているのがキリスト論的に理解された啓示概念ではないのか」（*Gottes Sein ist im Werden* Tübingen: Mohr 1986 S. 5）。8:31の分析に際してわれわれに強烈に訴えかけてきたのは、深い洞察をたてるエバハルト・ユングルのこの言葉、そしてアウグスチヌス『三位一体論』第15巻22の見えないものを見ることへの祈りであった。

³⁵ 「左手」鏡像体の最上段でイエスは栄光の先在=先・形態を語られた後「神殿の境内から」出て行かれ、直ちに第9章からの＜受難への旅＞の歩みが始まる。それは明らかに、第17章から第18章への移行に並行している。そこでは「大祭司の祈り」が終わるやイエスは＜逮捕されんがために＞「ギドロン谷の向こう」へと出て行かれるのである。

³⁶ ルカ文学的「見る」の吸収と転倒。3:13単独ではなく3:14がこれに併置されていることは、ヨハネ神学がパウロの思索との自己区別を意識しつつ深化していく過程を反映してはいないだろうか。そしてこの3:14の典拠『民数記』21:8-9に向かう動機をヨハネに与えたものが何であるかを考察する際に、ルカ文学との並行関係は無視し得ないようにわれわれには思われる。使徒言行録イエス昇天物語(1:8-12)はルカ9:28-36のイエスの変身物語と明らかに枠を形成していて、この枠の中でのイエスの長い旅は挙げて＜イエス昇天とその目撃＞への助走であるときえ思えるほどである（『サマリアの女の物語』はヨハネ版変身物語であるということがわれわれの結論である）。なお、この変身物語は「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」（ルカ9:51）というモチーフによるものであり、この物語が供食物語とペテロの告白に接続していることに注目したい。供食物語、ペテロの告白、決意してのエルサレムへの上京はヨハネ「福音書」第6-7章のストーリー展開そのものでもあった。さて、加山久夫氏はルカの「視覚言語」に関連して＜イエスの顕現—復活者の言葉—イエスの昇天＞図式、＜復活—四十日—昇天＞図式というまとめ方をされている（同氏『使徒行伝の歴史と文学』ヨルダン社、1986、pp470-472）。＜下向—しるしの業—上向＞というヨハネ図式のモデルを与えられているようで大変刺激的である。以上を念頭に《表—9》(p.172)を参照されたい。最上段のイエスの言葉の対応、ならびに「見えなくなる」のテーマの強調が目目される。対照表左欄は、行の下向に伴って何者かが降下していて、それは弟子たちとともに山を下ってエルサレムに戻り、宿の上の部屋まで上っている——そういうことを感じさせもする文章である。ともあれわれわれは、ヨハネの「転倒」の手法が焦点化されて解明されていけばヨハネの「資料への依存如何」の判断基準も変化してこざるをえないであろうことを期待している。

³⁷ $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ はヨハネ「福音書」における59の用例のうち、イエスの語りを提示するものが46回あり、そのうちイエス自身が自分の発語に関して一人称語尾を伴って語られるものが32回ある（「人の子」が基本的に自己言及の呼称であることと関係しよう）。パウロのように重との関連においてでもなく、ルカのように異言・憑依言語的でもなく、自らの言葉を＜父から教わったことを上から地上へ向けて語る垂直言語＞として自覚しつつ反省的に一人称形で $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ が語られるところが術語としての $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ である所以である。この $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ は第7章のわれわれのいうところの「第1説教I」(V.14-18)にも使用されているが、この部分は交錯配列の完成の際にまさにこの位置に「告別説教」を予示するものとして、ヨハネの手によって記述されたのだとわれわれは考える。因みに、7:24は「イエスの裁判」の予示である（小論p.165）。こうしてわれわれは例えばSchnakenburgのように、5:47に7:15-24を接続させるような、第7章を分割する読み方には反対である。さらに、われわれの構造体分析とカファルナウムの焦点化の過程の分析が、いわゆる第5章と第6章との錯簡問題に対するわれわれの解答である。

「わたしを見たから信じるのか」資料。

《 表-1 ナタナエルとトマスへのイエスの言葉 》

¹⁴⁵ フィリポはナタナエルに出会って εὐρίσκει 言った。「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った εὐρήκαμεν。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」

¹⁴⁶ するとナタナエルが、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言ったので、フィリポは、「来て、見なさい ἴδε」と言った。

¹⁴⁷ イエスは、ナタナエルが御自分の方へ来るのを見て εἶδεν、彼のことをこう言われた。「見なさい ἴδε。まことのイスラエル人だ。この人には偽りがない。」

¹⁴⁸ ナタナエルが、「どうしてわたしを知っておられる γινώσκεις のですか」と言うと、イエスは答えて、「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た εἶδόν σε 」と言われた。

¹⁴⁹ ナタナエルは答えた。「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」

¹⁵⁰ イエスは答えて言われた。「いちじくの木の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか ὅτι εἶπόν σοι ὅτι εἶδόν σε ὑποκάτω τῆς σικκῆς, πιστεύεις;。もっと偉大なことをあなたは見ることになる μείζω τούτων ὄψη。」

¹⁵¹ 更に言われた。「はっきり言っておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見るようになる ὄψεσθε。」

²⁰²⁵ そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た ἑώρακαμεν τὸν κύριον」と言うと、

トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見 εἶδόν μου, この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」

²⁰²⁶ さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

²⁰²⁷ それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい καὶ ἴδε τὰς χεῖράς μου。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

²⁰²⁸ トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。

²⁰²⁹ イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである ὅτι ἑώρακός με πεπαστευκός, μακάριοι οἱ μὴ ἰδόντες καὶ πιστεύσαντες。」

²⁰³⁰ このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。³¹ これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

《 表-2 イエスの最初の言葉——地上での、復活後の 》

1:35 その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。1:36 そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。1:37 二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。

1:38 イエスは振り返り、彼らが従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ——『先生』という意味——どこに泊まっておられるのですか」と言うと、

1:39 イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らについて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。1:40 ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。

1:41 彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア——『油を注がれた者』という意味——に出会った εὐρήκαμεν」と言った。1:42 そして、シモンをイエスのところに連れて行った。イエスは彼を見つめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ——『岩』という意味——と呼ぶことにする」と言われた。

1:43 その翌日、イエスは、ガリラヤへ行くこうとしたときに、フィリポに出会って、「わたしに従いなさい」と言われた。

20:13 天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うのと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」20:14 こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分らなかった。

20:15 イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」20:16 イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。

20:17 イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」

20:18 マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました εἶώρακα」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20:20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。20:21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」20:22 そう言うってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。20:23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

《 表-3 「福音書」第6章-第8章(中央3章)の構成 》

第6章

第1幕 「カファルナウムへ」		V.1-21
第1景 「供食物語Ⅰ」		V.1-15
第2景 「湖上歩行と『わたしはある』」	☆	V.15-21
第2幕 「カファルナウムにて」		V.22-71
第1景 「供食物語Ⅱ」		V.22-59
第1説教		V.22-33
第2説教	★	V.34-51b
第3説教		V.51c-59
第2景 「信と不信」		V.60-71

[★ 第2組鏡像体 (右手) ☆ 第3組鏡像体 (右手)]

第7章

第1幕 「ガリラヤにて」		V.1-9
第2幕 「神殿境内にて」		V.10-44
第1景 「祭りの初め」——イエス不在		V.10-13
<フェーズA> [眼前での多くのしるしの結果]		V.12-13
第2景 「祭りの半ば」——イエス神殿境内へ登場		V.14-36
第1説教Ⅰ [自己啓示の説教]		V.14-18
A 悪霊のテーマ [裏切り・逮捕]		V.19-20
B 第1説教Ⅱ [裁判]		V.21-24
C <フェーズB'> 右手		V.25-27
D 第2説教Ⅰ [「あなたの子です」]	鏡像体	V.28-29
E <フェーズB> 十字架の柱		V.30-32
D' 第2説教Ⅱ [「成し遂げられた」]	左手	V.33-34
C' <フェーズB''> 鏡像体		V.35-36
第3景 「祭りの最終日」——イエスは立ち上がって大声で言われた		V.37-44
B' 第3説教 水の説教 [脇腹からの血と水]		V.37-38
A' 聖霊のテーマ [霊の賦与]		V.39
<フェーズC>		V.40-44
第3幕 「サンヘドリンにて」		V.45-52

第8章

(後生の別人の手による追加が明らかな V.1-19 は、いまはこれを全く度外視する)

第1幕 「『わたしは世の光である』——光と証」		V.12-20
-------------------------	--	---------

《表-4 「第1組鏡像体」》

7²⁵ さて、エルサレムの人々の中には次のように言う者たちがいた εἶλεγον。「これは、人々が殺そうとねらっている者ではないか。²⁶ あんなに公然と話しているのに、何も言われない ἴδε παραρησία λαλεῖ καὶ οὐδὲν αὐτῷ λέγουσιν。議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めた ἐγνωσαν のではなからうか。

7²⁷ しかし、わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている οἶδαμεν πόθεν ἐστίν。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ οὐδεὶς γινώσκει πόθεν ἐστίν。」

7²⁸ すると、神殿の境内で教えていたイエスは、大声で言われた ἐκραξεν …… διδάσκων ὁ Ἰησοῦς καὶ λέγων。「あなたたちはわたしのことを知っており、また、どこの出身かも知っている κάμῃ οἶδατε καὶ οἶδατε πόθεν εἰμί。わたしは自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方 ὁ πέμψας με は真実であるが、あなたたちはその方を知らない οὐκ οἶδατε。」

7²⁹ わたしはその方を知っている οἶδα。わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになった παρ' αὐτοῦ εἰμι κάκεινός με ἀπέστειλεν のである。」

7³⁰ 人々はイエスを捕らえようとしたが、手をかける者はいなかった。イエスの時はまだ来ていなかったからである。

7³¹ しかし、群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、「メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなさるだろうか」と言った。

7³⁶ 『あなたたちは、わたしを捜しても、見つかることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない』と彼は言ったが、その言葉はどういう意味なのか τίς ἐστὶν ὁ λόγος οὗτος ὃν εἶπεν。」

7^{35B} ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行って、ギリシア人に教えるとでもいうのか。

7^{35a} すると、ユダヤ人たちが互いに言った εἶπον。「わたしたちが見つかることはない οὐχ εὐρήσομεν とは、いったい、どこへ行くつもりだらう ἢ ποῦ οὗτος μέλλει πορεύεσθαι。」

7^{34B} わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない ἴπου εἰμί ἐγὼ ὑμεῖς οὐ δύνασθε ἐλθεῖν。」

7^{34a} あなたたちは、わたしを捜しても、見つかることがない ζητήσατέ με καὶ οὐχ εὐρήσατέ με。

7^{33B} それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る ὑπάγω πρὸς τὸν πέμψαντά με。7^{33a} そこで、イエスは言われた εἶπεν。「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。」

7^{32B} 祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを捕らえるために 下役たちを遣わした ἀπέστειλαν。

7^{32a} ファリサイ派の人々は、群衆がイエスについてこのように ささやいているのを 耳にした。

《表-5 「第2組鏡像体」》その1

⁶³⁷ 父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのと
ころに来る πᾶν ὃ δίδωσίν μοι ὁ πατήρ πρὸς
ἐμὲ ἔξει。わたしのもとに来る人を、わたしは決
して追い出さない。

⁶³⁸ わたしが天から降って来たのは、自分の意志を
行うためではなく、わたしをお遣わしになった方
の御心を行うためである。

⁶³⁹ わたしをお遣わしになった方の御心とは、わた
しに与えてくださった人を一人も失わないで、終
わりの日に復活させることである。

⁶⁴⁰ わたしの父の御心は、子を見て信じる者 ὁ
θεωρῶν τὸν υἱὸν καὶ πιστεύων が皆永遠の命
を得ることであり、
わたしがその人を終わりの日に復活させることだ
からである。

⁸²⁹ わたしをお遣わしになった方は、わたしと共に
いてくださる ὁ πέμψας με μετ' ἐμοῦ ἐστίν。
わたしをひとりにはおられない οὐκ ἀφῆκέν
με μόνον。わたしは、いつもこの方の御心に適う
ことを行うからである。」

⁸²⁸ εἶπεν οὖν [αὐτοῖς] ὁ Ἰησοῦς そこで、イエ
スは言われた。「あなたたちは、人の子を上げた
ときに初めて、『わたしはある』 ἐγὼ εἰμιとい
うこと、また、わたしが、自分勝手には何もせず、
ただ、父に教えられたとおりに話している ταῦτα
λαλῶことが分かるだろう γνώσεσθε。

^{826b} しかし、わたしをお遣わしになった方は真実で
あり、わたしはその方から聞いたことを、世に向
かって話している κάγω ἃ ἔκουσα παρ' αὐτοῦ
ταῦτα λαλῶ εἰς τὸν κόσμον。」

^{826a} あなたたちについては、言うべきこと、裁くべ
きことがたくさんある πολλὰ ἔχω λαλεῖν καὶ
κρίνειν。

^{825b} εἶπεν αὐτοῖς イエスは言われた。「それは初
めから話しているではないか τὴν ἀρχὴν ὃ τι καὶ
λαλῶ ὑμῖν 。

^{825a} ἔλεγον οὖν αὐτῶν 彼らが、「あなたは、いっ
たい、どなたですか」と言うと、

^{824b} 『わたしはある ἐγὼ εἰμι』ということ信じ
ないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬ
ことになる。」

^{824a} εἶπον οὖν ὑμῖν だから、あなたたちは自分の
罪のうちに死ぬことになると、わたしは言ったの
である。

《表-5 「第2組鏡像体」》その2

^{64f} Εγόγγυζον οὖν οἱ Ἰουδαῖοι ユダヤ人たちは、
ὅτι εἶπεν イエスが「わたしは天から降って来たパンである」と言われたので、イエスのことであつて
やき始め、

^{64g} καὶ ἔλεγον こう言った。「これはヨセフの息子の
イエスではないか。我々はその父も母も知って
いる。 πῶς νῦν λέγει ὅτι どうして今、『わたし
は天から降って来た』などと言うのか。」

^{64h} わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくだ
さらなければ、だれもわたしのもとへ来ることは
できない。
わたしはその人を終わりの日に復活させる。

⁶⁴ⁱ 父を見た者は一人もない。神のもとから来た
者だけが父を見たのである。

^{64j} はっきり言っておく。信じる者は永遠の命を得
ている。

^{64k} わたしは命のパンである ἐγὼ εἰμι ὁ ἄρτος τῆς
ζωῆς。^{64l} あなたたちの先祖は 荒野野でマンナを
食べたが、死んでしまった。

^{64m} しかし、これは、天から降って来たパンであり、
これを食べる者は死なない。

・わたしはこの世に属していない。
・あなたたちはこの世に属しているが、
・が、わたしは上のものに属している。
・れた。「あなたたちは下のものに属している
・⁸²³ καὶ ἔλεγεν αὐτοῖς イエスは彼らに言わ

⁸²² ἔλεγον οὖν οἱ Ἰουδαῖοι ユダヤ人たちが、ὅτι
λέγει 「『わたしの行く所に、あなたたちは来る
ことができない』と言っているが、自殺でもする
つもりなのだろうか」と話していると、

^{821v} わたしの行く所に、あなたたちは来ることがで
きない。」

^{821B} だが、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬこと
になる。

^{821a} εἶπεν οὖν πάλιν αὐτοῖς そこで、イエスはまた
言われた。「わたしは去って行く。あなたたちは
わたしを捜すだろう。」

^{819v} もし、わたしを知っていたら εἰ ᾔδειτε、わた
しの父をも知るはずだ。」

^{819B} ἀπεκρίθη Ἰησοῦς イエスはお答えになった。
「あなたたちは、わたしもわたしの父も知らない
ὄψαδατε 。」

^{819a} ἔλεγον οὖν αὐτῶν 彼らが「あなたの父はどこに
いるのか」と言うと

⁸¹² Πάλιν οὖν αὐτοῖς ἐλάλησεν ὁ Ἰησοῦς λέγων
イエスは再び言われた。「わたしは世の光である
ἐγὼ εἰμι τὸ φῶς τοῦ κόσμου。わたしに従う者は
暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」

《 表-6 「第3組鏡像体」 》

615 イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでもうまた山に退かれた。

616 夕方になったので、弟子たちは湖畔へ下りて行った。617 そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムに行こうとした。既に暗くなっていたが、イエスはまた彼らのところには来ておられなかった。

618 強い風が吹いて、湖は荒れ始めた。

619 二十五ないし三十スタディオンばかり漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた θεωροῦσιν καὶ ἐφοβήθησαν

620 ὁ δὲ λέγει αὐτοῖς イエスは言われた。「わたしはある。恐れることはない ἐγὼ εἰμι· μὴ φοβείσθε

621 そこで、彼らはイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。

856b しかし、イエスは身を隠して、神殿の境内から出て行かれた。

859a すると、ユダヤ人たちは、石を取り上げ、イエスに投げつけようとした。

858 εἶπεν αὐτοῖς Ἰησοῦς イエスは言われた。「はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある。』 πρὶν Ἀβραάμ γενέσθαι ἐγὼ εἰμί

857 εἶπον οὖν οἱ Ἰουδαῖοι πρὸς αὐτόν ユダヤ人たちが、「あなたは、まだ五十歳にもならないのに、アブラハムを見たのか」と言うのと、

856b そして、それを見て、喜んだのである καὶ εἶδεν καὶ ἐχάρη」

856a あなたたちの父アブラハムは、わたしの目を見るのを楽しみにしていた ἡγαλλίασατο ἵνα ἴδῃ τὴν ἡμέραν τὴν ἐμήν 。

(13)クレド・イン・ウヌム	古様式	二長調	神	
(14)バトレム	協奏フーガ	二長調	=父	
(15)エト・イン・ウヌム	二重唱	ト長調	キリスト	
(16)エト・インカルナートゥス	合唱	ロ短調	受肉	
(17)クルチフィクスス	合唱 (パッサカリヤ)	ホ短調~ト短調	受難	
(18)エト・レスレクシト	協奏フーガ	二長調	復活~再臨	
(19)エト・イン・スピリトゥム	独唱	イ長調	聖霊、教会	
(20)コンフィテオル	古様式	嬰~短調	洗礼	
(21)エト・エクスペクト	協奏フーガ	二長調	死者の復活、 永遠の生命	

《 図-3 ロ短調ミサ曲 BWV232・ニケア信経(クレド)構成図 》 小学館版『バッハ全集7』p41

《 表-7 「福音書」第4章-第10章対照表 》

41 さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、⁴²—洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちである—⁴³ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。

⁴⁶ イエスは、「水を飲ませて下さい」と言われた。

⁴⁴⁴ しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内て泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」

⁴²¹ あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る

⁴²⁶ 『わたしはある、あなたと話している者だ』

⁴³¹⁻³⁸ 「刈り入れ」のたとえ

⁴⁴³⁻⁵⁴ 役人の息子をいやす

¹⁰⁴⁰ イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所に行き、そこに滞在された。¹⁰³⁹ そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。

¹⁰³² イエスは言われた。「…その中のどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」

¹⁰²⁸ わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。

¹⁰¹⁶ わたしには、この園いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。

¹⁰¹¹ 『わたしは良い羊飼である』

¹⁰¹⁻⁶ 「羊の園い」のたとえ

⁹³⁵⁻⁴¹ イエスの自己啓示

《 表-8 マグダラのマリアの θεωρεῖν 》

^{20:11} マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると ὡς οὖν ἔκλαιεν, παρέκυψεν εἰς τὸ μνημεῖον、¹² イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた θεωρεῖ。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。

^{20:13} 天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」

^{20:14} こう言いながら後ろを振り向くと ἐστράφη、イエスの立っておられるのが見えた θεωρεῖ。しかし、それがイエスだとは分からなかった。

^{20:15} イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を選び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」

^{2:16} イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて στραφείσα、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。

《 表一9 使徒言行録第1章一ヨハネ「福音書」第7章対照表 》

8:18 あなたがたの上に聖霊が降るとあなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」¹⁹ こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった [雲がイエスを彼らの目から離れた]。

¹²⁰ イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた *ὡς ἀπειρίζοντες ἦσαν ... πορευόμενου αὐτοῦ*。すると *καὶ ἰδοῦ*、白い服を着た二人の人がそばに立って、¹²¹ 言った。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて *[ἐμ]βλέποντες* 立っているのか。

あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見た *ἐθεάσασθε αὐτὸν πορευόμενον* のと同じ有様で、またおいでになる。」

¹²² 使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。¹²³ 彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。

^{7:26} 『あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることができない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない』と彼は言ったが、その言葉はどういう意味なのか]

^{7:27} ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行行って、ギリシア人に教えるともいうのか。

^{7:28} すると、ユダヤ人たちが互いに言った。「わたしたちが見つけることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう

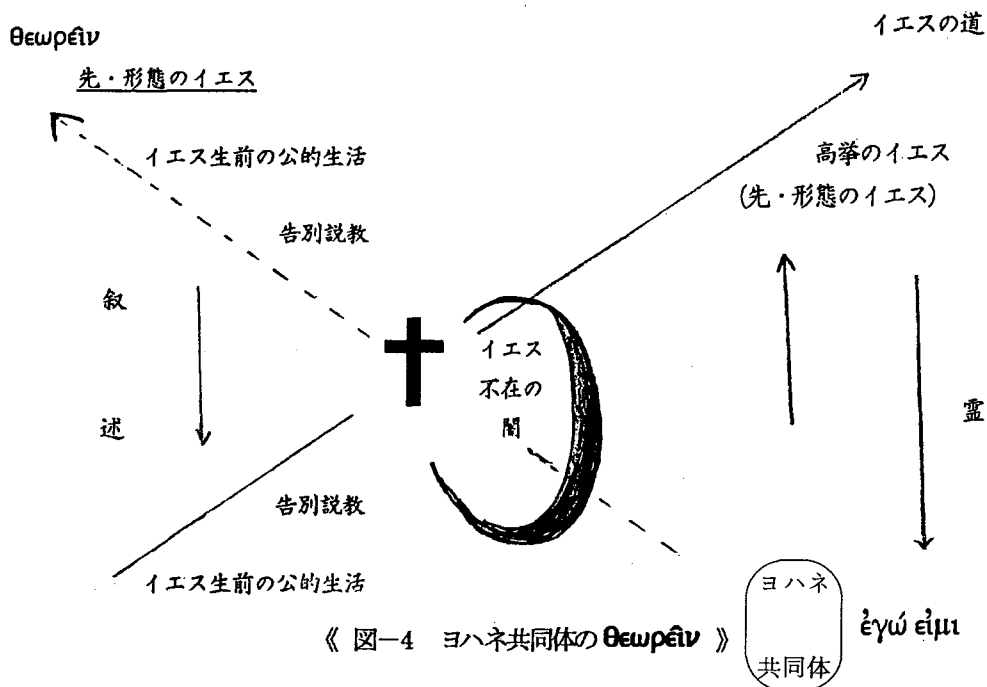
^{7:29} わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない。」

^{7:30} あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることができない。

^{7:31} それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。

^{7:32} そこで、イエスは言われた。「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。

祭りに上って行ったとき、イエス御自身も、人目を避け、隠れるようにして上って行かれた



謝辞：

提示語分析、構造体分析という新しいフィールドワークを必要とするわれわれのヨハネ「福音書」研究は、新たなテーマ設定の度毎に教文館版『パソコン用 聖書 新共同訳』の恩恵をますます痛感しつつ進行中である。研究の一部を公刊するに際して、関係各位のご努力・ご労力への感謝を表明します。